

Ch. XIX, 001<sup>b</sup> は、唯一枚の裏面だけであつて、其の譯述の體裁を知る材料としては不充分たるを免れぬが、多分(002)と同一種のものであつたらうと思ふ。下に譯載する如く、俱舍論の譯では無くして、俱舍論の説く梵福に對する釋として、增壹阿含經(?)に説く四梵之福を引用し來つたものである。

## 七 譯文の特徴

茲に更に注意して置かなければならぬことは、本書に用ゐた譯文としての文體である。言ふまでもなく回鶻語といふものは、所謂ウラル・アルタイ語系に屬するものであつて、其の措辭法に於ては、主語客語を始め、之に伴ふ諸品詞の位置は、略ぼ我が國語と同様というて差支ない。然るに本書の文體を見ると、此の措辭法は全く轉倒して、例へば主語なる名詞の次に、直に客語なる動詞が來て、目的語が其の次に措かれる如き奇觀を呈して居る。これは今も昔も此の語系に屬する國語の措辭法として、決して普通の體裁と稱す可らざるものである。然らば何故にかゝる奇觀を呈するに至つたかと考へて見ると、これは全く原文なる漢文の文體に、出来る丈け忠實に従はうとしたが爲に外ならぬ。言換ふれば此の翻譯は、漢文の一語一語を或る程度まで其の儘の語序に於て、回鶻語に譯出したに過ぎないものである。かゝる現象は、漢文學が附近の諸國に勢を及ぼす際に屢々認めらるゝ事で、我が國でも一種の文體に於ては、國語の本來の語序を變じて、漢文のそれに従つて居ることは、今更いふまでもない事であるが、この翻譯に用ゐられた體裁は、かゝる場合よりも遙に進んで、原文の措辭法に追隨したものであるといはなければならぬ。下に掲げる譯述について見ても、此の現象は一見して明かに觀取せらるゝ所である。